

# 日本文化研究コーパス・研究分野別文献案内の紹介

## ・日本文化研究コーパス

本教育プロジェクトにおける「日本文化研究コーパス」の作成は、本学に蓄積されている日本研究関係の知的資源を活用し、電子メディアを利用してそれを広く海外に発信することで、国際的情報伝達のノウハウを学び、情報伝達スキルを練磨することを目的としています。

この実習の成果として、『お茶の水女子大学百年史』、『保育唱歌』、『女学生夏季制服』、『東京女子高等師範学校附属高等女学校生徒服装の変遷』、『幼稚園唱歌』が本学ホームページ内の「日本文化研究コーパス」に掲載されています。

★日本文化研究コーパスは、本学図書館内 TeaPot で公開しています★



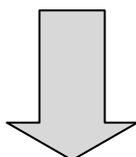
<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/4566>

## 1. 閲覧例：『東京女子高等師範学校附属高等女学校生徒服装の変遷』

The screenshot shows the TeaPot library interface. A search for '日本文化研究コーパス' (Japanese Cultural Research Corpus) has been performed, resulting in 10 items. The search results are displayed in a table with columns for '発行日' (Publication Date), 'タイトル' (Title), '著者' (Author), and 'ファイル' (File). The first item is '『女学生夏季制服(東京女子高等師範学校附属高等女学校、1939年)』解説' by Nanami Tomoko. The second item is '『東京女子高等師範学校附属高等女学校生徒服装の変遷』(坂内青嵐画、1934年頃)' by Higashimoto Rika, Ariyama Rika, and Higashimoto Rika. The third item is 'お茶の水女子大学百年史' published on May 31, 1984. The fourth item is 'お茶の水女子大学百年史(テキスト版)' published on May 31, 1984. The fifth item is '1939年 女学生夏季制服' by the Tokyo Women's College of Education. The sixth item is '1934年 東京女子高等師範学校附属高等女学校生徒服装の変遷' by Inoue Seiran, Iwano, and Iwano. The seventh item is '1883年 保育唱歌' by Mizuno Taizo. The eighth item is '2009年5月 明治16年清水たづ語『保育唱歌』解説' by Higashimoto Rika, Ariyama Rika, and Higashimoto Rika. The ninth item is '2009年5月 幼稚園唱歌' by Iwano, Iwano, and Iwano.

発行日	タイトル	著者	ファイル
2009年3月	『女学生夏季制服(東京女子高等師範学校附属高等女学校、1939年)』解説	ナンノミ、トモコ; 経波, 知子	<a href="#">View</a>
2009年3月	『東京女子高等師範学校附属高等女学校生徒服装の変遷』(坂内青嵐画、1934年頃)	ナンノミ、トモコ; 経波, 知子	<a href="#">View</a>
2009年5月	『幼稚園唱歌』解説	ヒガシモト, リカ; 東元, リカ	<a href="#">View</a>
1984年5月31日	お茶の水女子大学百年史	『お茶の水女子大学百年史』刊行委員会	<a href="#">View</a>
1984年5月31日	お茶の水女子大学百年史(テキスト版)	『お茶の水女子大学百年史』刊行委員会	<a href="#">View</a>
1939年	女学生夏季制服	東京女子高等師範学校附属高等女学校	<a href="#">View</a>
1934年	東京女子高等師範学校附属高等女学校生徒服装の変遷	イノウエ, セイラン; 坂内, 青嵐	<a href="#">View</a>
1883年	保育唱歌	清水, たづ	<a href="#">View</a> <a href="#">View</a>
2009年5月	明治16年清水たづ語『保育唱歌』解説	ヒガシモト, リカ; 東元, リカ	<a href="#">View</a>
2009年5月	幼稚園唱歌	[豊田, 実雄?]	<a href="#">View</a> <a href="#">View</a>

上記のうち『東京女子高等師範学校附属高等女学校生徒服装の変遷』をクリック



お茶の水女子大学 教育・研究成果コレクション  
**TeaPot**  
 Ochanomizu University Web Library - Institutional Repository

お茶の水女子大学 Ochanomizu University

お茶の水女子大学 | 館蔵目録 | TeaPot

TeaPotメニュー  
 ホーム  
 ブラウズ  
 主編別  
 著者  
 資料種別  
 日付  
 ダウンロード集  
 Top10(月)  
 Top10(週)  
 DSpaceについて  
 TeaPotについて知らない方はこちらへ <Click!>

TeaPot - Ochanomizu University Web Library Institutional Repository >  
 A 特別コレクション >  
 大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的価値を伝えるための育成」 >  
 日本文化研究コーパス >

このアイテムのファイル:

ファイル	記述	サイズ	フォーマット
fukusouhennsenzu.pdf		698.14 kB	Adobe PDF <a href="#">View!</a>

タイトル: 東京女子高等師範学校附属高等女学校生徒服装の変遷  
 著者: 坂内, 青嵐  
 著者(別表記): バンナイ, セイラン  
 発行日: 1934  
 内容記述: 「明治十八年から三十一年の式服」「明治二十五年頃の通学服」「明治三十年頃の通学服」「明治三十五年頃の通学服」「大正元年頃の通学服」「大正十年頃の通学服」「昭和七年以降の通学服」(セーラー服)「昭和七年以降の通学服」(ジャンパースカート)の掛軸八幅  
 資料種別: Others  
 関連URI: <http://hdl.handle.net/10083/33465>  
 出現コレクション: 日本文化研究コーパス

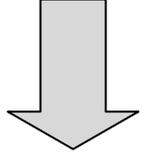
このアイテムの引用には次の識別子を使用してください: <http://hdl.handle.net/10083/33466>

[アイテムの詳細コードを表示する](#)

このリストに掲載されているアイテムはすべて著作権により保護されています。

Copyright (c) 2007 Ochanomizu University. All Rights Reserved.  
 TeaPot is powered by DSpace 1.4.2

お茶の水女子大学附属図書館  
 dspace-teapot@cc.ocha.ac.jp



東京女子高等師範学校附属高等女学校生徒服装掛軸を閲覧できます。



「明治十八年から明治三十一年の式服」



「明治二十五年頃の通学服 (低学年)」

## 2. 解説

コーパス内には本学博士課程在籍学生による解説も掲載されています。

### 「女学生夏季制服」(東京女子高等師範学校附属高等女学校、1939 年) 解説

「女学生夏季制服」と題された 12 枚綴りの冊子は、東京女子高等師範学校附属高等女学校(お茶の水女子大学附属高等学校の前身。以下、附属高女とする)が作成した夏用セーラー服の型とその製作手順を記したものである。この冊子は、1939(昭和 14)年 2 月に全国高等女学校長協会が行なった女学生制服のデザイン懸賞に応募されたものと思われる。その根拠は、①全国高等女学校長協会による女学生制服懸賞の募集要項に「◇募集服女学生夏季制服」(『教育週報』717 号、昭和 14 年 2 月 11 日)とあり、冊子の表紙にある題名「女学生夏季制服」と一致すること、②冊子の「(四)材料費」の末尾に「昭和十四年二月」とあり、懸賞募集の締め切り期日(昭和 14 年 2 月 28 日)と一致することである。

全国高等女学校長協会が女学生制服を懸賞募集した 1939(昭和 14)年は、戦時下における物質面及び精神面の統制が服装や日常生活に及ぶ時期にあたる。その前年の 1938(昭和 13)年には国家総動員法が公布され、また国民服制定を目指した国民精神総動員中央聯盟の「服装に関する委員会」が組織された。こうした情勢のなかで、全国高等女学校長協会は「必ずしも現下の非常時に即応するものと限らず、一般的に見て日本の女学生にふさはしきものといふ点に目標を置いて」(『教育週報』717 号)、女学生の模範制服の型を公募した。しかし実際に応募された作品には非常時を加味したものが多く、附属高女は、「フランス型」と呼ばれる用布を節約したセーラー服の上衣と、襷の代わりに切替えを入れた全スフ(ステープル・ファイバー)のスカートの制服を応募した。附属高女案の夏用セーラー服は 1939(昭和 14)年 4 月に応募総数 107 点の中から一等に選ばれ、東京三越に展示された。なお、二等には久萬せい(実践高等女学校)のジャンパースカートと齋藤きよ(府立第六高等女学校)のジャンパースカートが選ばれた(『家事及裁縫』13 巻 6 号、昭和 14 年)。

女学生制服の懸賞募集に一等当選した翌年の 1940(昭和 15)年に、附属高女では戦時下の物資節約とスフ織物使用の関係より、1932(昭和 7)年に制定されたセーラー型とジャンパー型の二種類の制服を襟のない三つ釦の前合せの上衣とスカートの制服に改定した(校友会誌『お茶の水』56 号、昭和 18 年)。さらに一年後の 1941(昭和 16)年には文部省の学校生徒の制服統制に関する通牒により、へちま衿の全国統一型を制服とした。1939(昭和 14)年に一等当選した附属高女の夏用セーラー服は、その後の時局の変化と文部省の統制により間もなく変更された。「女学生夏季制服」の冊子が示す制服は、1939(昭和 14)年において戦局の情勢や国家統制に対応しながら、女学生にふさわしい制服の型を模索したものであったといえる。

文責：難波知子(お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 博士後期課程在籍 2009 年 3 月)

### 「東京女子高等師範学校附属高等女学校生徒服装の変遷」(坂内青嵐画、1934 年頃) 解説

お茶の水女子大学附属高等学校には、その前身である東京女子高等師範学校附属高等女学校(以下、附属高女とする)の明治から昭和初期にかけての通学服の変遷を描いた日本画の掛軸(八幅)が残されている。この掛軸は 1934(昭和 9)年 10 月 29 日に開催された東京女子高等師範学校の開校六〇周年記念式典の際に校内展示するために制作された。軸装の全長は 2 メートル(画はおおよそ 70×160 センチメートル)に及び、それぞれ「明治十八年から三十一年の式服」「明治二十五年頃の通学服」「明治三十年頃の通学服」「明治三十五年頃の通学服」「大正元年頃の通学服」「大正十年頃の通学服」「昭和七年以降の通学服」(セーラー服)「昭和七年以降の通学服」(ジャンパースカート)と題されている。これらは 1932(昭和 7)年の制服制定より 1934(昭和 9)年の開校六〇周年記念式典の間に制作されたと推定される。

掛軸の制作者は、日本画家の坂内青嵐(1881-1936)である。同校に通う娘(房江)をモデルに描いたといわれる。坂内青嵐(本名、滝之助)は福島県大沼郡津高田町に生まれ、1908(明治 41)年に東京美術学校日本画科本科を卒業した。文展及び帝展に出品、入選を果たし、歴史画家として活躍した。代表作には、渡辺崋山を描いた「先覚照影」(福島県立美術館所蔵)がある。

八幅の掛軸を年代順にみると、通学服が和装から和洋折衷を経て洋装へと変遷していく様子が描かれている。はじめの三幅が和装、次の三幅が着物に袴、束髪、リボン、洋傘、靴、鞆を取り合わせた和洋折衷の服装、おわりの二幅が洋装である。

はじめの「明治十八年から三十一年の式服」から「明治二十五年頃の通学服」「明治三十年頃の通学服」の三幅には着物姿の生徒が色彩豊かに描かれている。1882(明治 15)年の開校当初には特別な服装規程はなく、生徒心得には質素を旨とし、華美を戒める方針が示されるのみであった。卒業生の回想によれば、明治 30 年前

後の服装は長袖の着物に帯をお太鼓、堅やの字、貝の口などに結び、麻裏の草履や雪駄を履き、頭髮はおさげ、束髪、桃割れ、唐人髷、稚児髷などまちまちであった(茂木由子「明治三十年時代の学校の御話」『作楽』45号、1934年)。この頃まではそれぞれの家庭において階層や年齢、趣味を反映した装いが行なわれ、掛軸には明治の「御嬢様」の姿が描き出されたと思われる。

続く「明治三十五年頃の通学服」「大正元年頃の通学服」「大正十年頃の通学服」の三幅には袴を着用した生徒が描かれている。附属高女で袴が規定されたのは1898(明治31)年のことである。日清戦争以後、日本女性の体位向上の見地から女子への運動が奨励され、機能的かつ衛生的な服装として袴が全国の女学校に普及した。さらに附属高女では1900(明治33)年に運動靴の使用、1906(明治39)年に徽章が規定され、そうした服装規程の変遷が掛軸に描きこまれた。また前出の三幅の掛軸と比べると、頭髮が日本髪から束髪に、持ち物が和傘から洋傘に、風呂敷包みから鞆に変わった様子が描き分けられている。

おわりの「昭和七年以降の通学服」(セーラー服)「昭和七年以降の通学服」(ジャンパースカート)の二幅には、1932(昭和7)年に制定された二種類の制服姿の生徒が描かれている。これらの制服制定に至るまでに、1919(大正8)年に一年から三年の生徒に筒袖又は洋服の着用、1930(昭和5)年に五種類の標準服が選定された。大正年間には第一次世界大戦、生活改善運動、関東大震災などの影響により、服装を含む生活全般の見直しや改革が進められた。そうした状況のなかで通学服は袴から洋服へと転換し、掛軸には制服として規定された洋服(セーラー服とジャンパースカート)が描かれた。

以上でみてきた八幅の掛軸は、附属高女における通学服変遷の公式記録という性格をもっていた。ただし、この公式記録は1934(昭和9)年よりそれまでの服装変遷の歴史を振り返ってまとめられたものである。このことは、通学服の描写や構成に制作者及び依頼者やその時代の歴史観が含まれていることを意味する。すなわち、どの服装を取り上げるのか、どのように描くのかといった1934年当時の価値判断や解釈が多分に加わっていると考えられる。

そのことを示す具体例として、掛軸に描かれなかった服装に注目してみたい。卒業生の服装に関する回想と照らし合わせると、掛軸には明治20年前後の鹿鳴館時代の洋装、明治後期の改良服の試みが描かれていないことがわかる。また校史(後掲の年表参照)に記録されているにも関わらず、1930(昭和5)年に選定された五種類の標準服も取り上げられていない。掛軸が制作される際、どの服装を描くかについて選別が行なわれたことは明らかである。

では、なぜこのような題材の選別が行なわれたのだろうか。その理由の一つとして「和服から洋服への変遷」という近代の服装史観の問題を指摘できる。上述のように、八幅の掛軸は、通学服が和装から洋装へと変遷していく様子を描いている。しかし、一時の流行として語られる鹿鳴館時代の洋装、和服でも洋服でもない改良服の試み、制服制定までの過渡期とみなされる標準服はどれも、このような単線的な服装史観には必ずしもうまく当てはまらない事例である。それゆえ、これら三つは掛軸に描かれなかったのではないだろうか。当該資料は通学服の変遷を示す歴史資料として意義があるが、ただしそれはまた一方で、服装の上に展開された葛藤や試行錯誤の軌跡を(結果的に)見えにくくしている可能性があるといえる。

以上のような資料としての性格を念頭に置いて眺めるならば、八幅の掛軸は明治から昭和初期にかけての通学服の変遷を単に伝えるだけでなく、五十年に及ぶ服装変遷の歴史をどのように認識し、いかに表現し定着させるかという歴史認識や歴史像の形成に関わる資料として読み解くことができる。「東京女子高等師範学校附属高等女学校生徒服装の変遷」は、そこに描かれたものと描かれなかったものの双方を見渡すことで、日本近代の服装変遷に対する理解の幅を広げ、多様な解釈の可能性を拓く資料となる。

文責：難波知子(お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 博士後期課程在籍 2009年3月)

## 『幼稚園唱歌』 解説

『幼稚園唱歌』とは、現在、お茶の水女子大学附属図書館の倉橋文庫に所蔵されている貴重本で、墨筆による歌詞集である。これが記された年月、署名についての記載はないが、東京女子師範学校(現東京女子大学)の原稿用紙に書かれていることから、その設立の1875(明治8)年11月以降のものであることは明らかである。また、その筆跡から豊田英雄によるものではないかともいわれている。表題には「幼稚園唱歌」とあるが、伊沢修二やメーソン等の功績の一つ「幼稚園唱歌集(明治20(1887)年文部省より出版)」ではなく、「保育唱歌」の歌詞となっている。「保育唱歌」の歌詞を集めた歌詞集としては、明治19(1886)年、市川八十吉編『幼稚園唱歌集』が出版されたともいわれているが、「保育唱歌」と同様、歌詞集においても、雅楽家や保育関係者等によって、私的な形でまとめられたものが今に伝わっていると考えられる。本学倉橋文庫には、清水たづによる『保育唱歌』の墨譜も所蔵されており、本学「日本文化研究コーパス」内、『明治16年 清水たづ譜 「保育唱歌」』および、

『明治16年 清水たづ譜「保育唱歌」解説』を参照されたい。

なお、「保育唱歌」の歌詞は、フレーベル主義幼稚園教育書を翻訳した『幼稚園』、『幼稚園記』の中からも選出されている。その他に、『万葉集』、『古今和歌集』、『明倫歌集』など日本の古歌が用いられ、唱歌作成に従事した保母、豊田英雄、近藤濱によって、新たに作られた歌詞もみられる。

「保育唱歌」の歌詞集、およびその譜が、個人の手によってまとめられたものであることを上に述べたが、収められた曲の種類、その曲順もそれぞれに異なる。本学所蔵の、『幼稚園唱歌』の歌詞集には、そのうち91曲の歌詞が収められ、その曲順は「保育唱歌」の上申年月順にほぼ並べられている。しかしながら『幼稚園唱歌』にある「開誘歌」との分類は、豊田英雄作による歌詞（通番号1-9）にのみ付けられ、これらは上申年月が判明しない。当時、保育のことを開誘といい、幼稚園における唱歌を「開誘歌」と称していたことが『日本幼稚園史（1934年、倉橋惣三・新庄よしこ共著、東洋図書、231頁）』にみられる。中山エイ子『「保育唱歌」の古歌について（2004年『日本学研究』第7号182頁）』によれば、これらは、保育唱歌の作曲において、上申という形がとられる以前に、最も早い時期に作曲されたものではないか、との指摘がある。

記載事項としては、曲題、歌詞、歌詞の出典（作詞者、収められている歌詞集など）がある。その他に、分類（「開誘歌」、「親子歌」、「朋友歌」、「神祇歌」、あるいは「遊嬉」、「四季」、「修身」、「勸学」等）を示すもの、「不用」、「不」等の付記、「大人用」、「幼児用」、「幼児使はず」等の、朱筆、あるいは鉛筆での書き入れもみられる。これらは、教材として唱歌を検討・整理するために書かれたもの、あるいはそれを行った結果であるとも考えられる。

これらのことを総合すると、『幼稚園唱歌』がまとめられた目的として、それまでに書かれた唱歌を整理すること、およびその活用という展開などがあつたのではないかと推測することも可能であろう。

文責：東元りか（お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 博士課程在籍 2009年5月）

## ・研究分野別文献案内

本プロジェクトにおける「情報伝達スキルの練磨」の実習の一環として、本学の大学院生と教員が協力して学習者向けの「研究分野別文献案内」を作成し、それを本学図書館のホームページ上で公開しました。本年度は、「日本音楽」と「日本近現代史」の2分野の文献案内を作成し、下に掲載しました。

こうした文献案内を電子メディアを通じて広く一般に公開することで、学外の学習者・研究者も、本学の教育資源を活用することが可能になります。その意味で、この成果は、たとえ未だ小規模ではあっても、「知」の拠点としての大学が果たすべき社会貢献の重要な一歩となるに違いない、と確信しています。



日本研究基礎文献リスト（分野別）表紙